

令和5年度 国語科実践・研究計画

部 員	○鎌田 雅子、鎌田 佳佑、菅野 宣衛
-----	--------------------

研究テーマ
自覚的に言葉の力を働かせ、言葉とよりよく向き合う子どもを育む学び

1 研究テーマについて

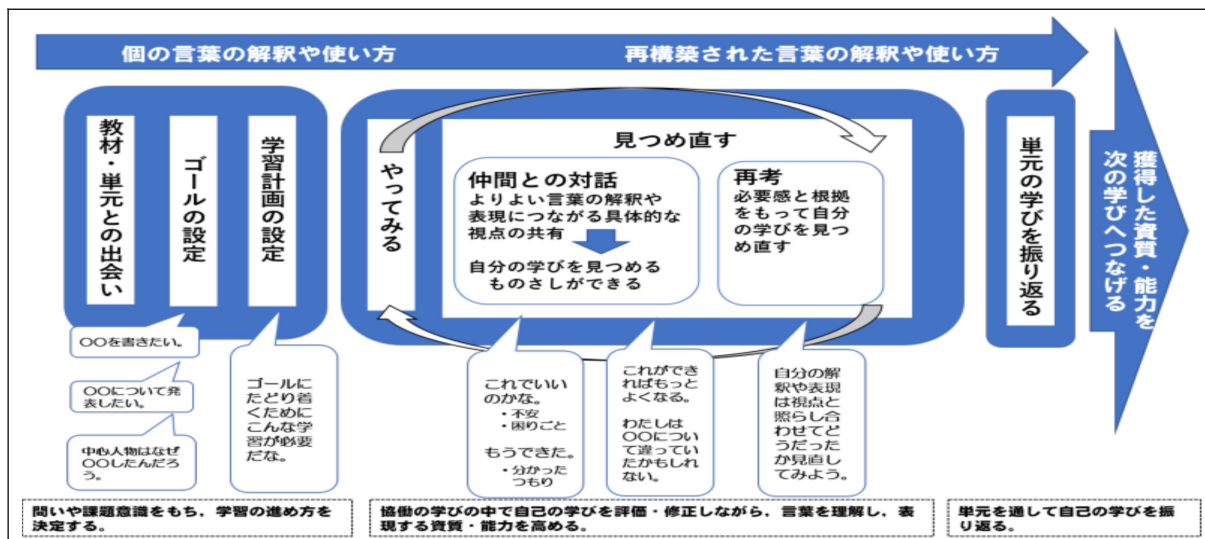
国語科の学習は、これまで何気なく使ってきた言葉を学習の対象として意識的に捉え直すことで「言葉がもつ力」を学び、自らの「言葉の力」を更新することである。この「言葉の力」は、情報の獲得・発信や他者とのコミュニケーションなど、日々の生活の中で行われる様々な言語活動の基盤となる。

言葉の選び方や用い方で受け手の印象が変わることに気付く、言葉と向き合ったときに生まれた問いを協働で解き明かす、というように、言葉に対する認識が新たになることに学ぶ楽しさを感じている姿が見られる。また、自分の発見を伝えるための構成や表現の工夫を見いだし推敲を始める姿から分かるように、学んだことを役立て活かそうとする子どもが多い。一方で、個々の魅力ある表現に子ども自身が気付かないまま新しく書き直していく場面も見受けられ、こうした前年度の実践の反省から、協働で見いだした読み方・書き方・話し方・聞き方とその効果を確かめた上で、自分に必要なものを取捨選択する力を高める必要が見えてきた。

そこで、相手や自分の伝えたいことを基に言葉を選ぶ過程を大切に扱う。仲間や教師からのフィードバックや揺さぶりを得る場を設定し、多様な言葉の解釈に触れる中で自己決定が行われるようにする。よりよい言葉の選択・決定の根拠として「学びのものさし」を更新して言葉と向き合う子どもの姿を期待し、本テーマで実践を積み重ねていく。

国語科で目指す自律した子どもの姿

- ・ 根拠をもって自らの解釈や表現を吟味し、言葉を正確に理解してよりよく表現しようとする姿
- ・ 言葉の効果や言葉に着目した学び方のよさを自覚し、単元を越えて活用する姿



図：国語科 自律した学習者を育てる学習のプロセス

2 研究の重点〈○は具体的な取組の例〉

よりよい言葉の解釈や表現を生み出すために、協働で見いだした学びのものさしを更新して吟味する場の設定

- 「学びのものさし」を繰り返し活用しながら、自分や友達の言葉の解釈や表現を再検討する単元構成を工夫する。
- 子どもの実態に応じて「自分の考えはどのように変わったのか」「なぜ、そう考えたのか」「学んだことは何か」という視点で、自分の言葉に関する選択・決定を振り返る場を設定する。